

言語コミュニケーションに対する考え方にみる文化差 日本とイタリアの比較

郡 史 郎

要旨：アンケート調査に基づいてコミュニケーションに対する考え方が日本人とイタリア人でどう異なるかを検討した。アンケートではまずイタリア人のコミュニケーション様式の特徴として「自分の言いたいことを理解させるためにも、また相手の言おうとすることを理解するためにも努力をおしまず」、「字のうまいへたには無頓着だが、話術にはこだわりがあり」、「おしゃべりを人をもてなすための重要な手段として用いている」という3つの仮説を立て、各々の妥当性を検討した。さらに飽戸弘氏の言う「言語コミュニケーションへの信頼度」「明確な表現への志向度」「『沈黙は金』と思うか」「ホンネとタテマエを区別するか」についても日伊の比較を試みた。回答の分析の結果、日伊のコミュニケーション文化の大きな差として、コミュニケーション成立へむけての精力的な努力の程度と、字に対する態度の違いが大きいことがわかり、最初の2つの仮説はほぼ支持された。平均的なイタリア人は日本人よりコミュニケーション欲求が強いらしく、しゃべっても疲れるということがあまりなく、初対面の人とでも気軽に話し込むが、現実にはその欲求は十分に満たされていないようである。逆に日本では初対面の人と気軽に話し込むことは少なく、おしゃべり好きだとしてもそれは特定の知人とおしゃべりのようであることが推察された。しかし一方ではしゃべることを重荷に感じている人が日本にもイタリアにもいる。「言語（コミュニケーション）への信頼性」「明確な表現への志向性」「『沈黙は金』と思うか」については日伊で差があるとは言えないが、日本人のホンネ・タテマエ区別志向とイタリア人のホンネ表現志向の差は明瞭に出た。コミュニケーションに対する態度として、文化的背景と同様に個人のパーソナリティも重要であることも確認された。

Cultural Differences in the Attitudes toward Verbal Communication: Japanese and Italians

Shiro KORI

Abstract: Based upon the results of a questionnaire conducted on 47 Japanese and 50 Italians, this paper describes differences in the attitudes toward verbal communication between the two cultures. Three hypotheses comparing characteristic styles of communication of Italians with Japanese were tested: (1) that the Italians would make a greater effort to achieve mutual understanding than would the Japanese, both in making themselves understood to others and to understand others; (2) that the Italians would prefer having good speaking skills to good handwriting skills; (3) that chatting would be seen by the Italians as an important device in entertaining listeners. The results of the questionnaire supported the first two hypotheses. The results also suggested that Italians feel a greater need for chatting, even though such a need may not always be satisfied.

1. はじめに

異文化間のコミュニケーション・ギャップとしてもっとも深刻なものは、コミュニケーションという行為自体に対する考え方の違いや、そこに直接起因する社会習慣や現実のコミュニケーション行動の差ではないだろうか。よく、日本では「巧言令色鮮仁」であり「以心伝心」が理想になっていると言われ、欧米ではそうではないとされる。一方がなるべくしゃべらないことを理想とし、一方が逆だというのであれば、コミュニケーションの成立そのものさえ危ういわけである。

本稿では、鮑戸弘氏による日米コミュニケーション文化の比較という先行研究を踏まえながら、日本とイタリアを対象として、コミュニケーションという行為自体に対する考え方やそれに直接起因する社会習慣にどのような違いがあるかをアンケート調査の結果に基づいて考慮する。

2. 鮑戸氏による日米のコミュニケーション文化の比較

鮑戸弘氏(1984)は、日本とアメリカの「コミュニケーション文化」の差を規定すると想定される要因として、日本の「以心伝心」仮説と、その裏返しとしてのアメリカの「言語への信頼」仮説、アメリカの「口頭より文書を重視」仮説、日本の「沈黙は金」仮説、そして日本の「ウソも方便」仮説を取り上げ、それぞれの仮説の妥当性を日米の学生を対象にしたアンケート調査によって検討した。アンケートの方法は、たとえば「あまり沢山おしゃべりをする人間にろくな人間はいない」(「沈黙は金」仮説に対応)や、「人間はどんなことでも時間をかけて話し合えば、お互いに理解し合えるものだ」(「言語への信頼」仮説に対応)というような質問文を全部で9文用意し、個々の文への同意・不同意の程度を4段階で答えるというものである。

鮑戸氏のアンケートの単純集計結果によれば、アメリカの「言語への信頼」仮説、アメリカの「口頭より文書を重視」仮説、そして日本の「ウソも方便」仮説については支持されたが、「沈黙は金」仮説ではテスト文によって日米の傾向が逆になり、「以心伝心」についてはむしろアメリカの方が高く同意したという。ただし、鮑戸氏の調査の単純集計結果で、日米に回答の差があるとされる質問でも、日本とアメリカで対照的というほどの大きな差が出たわけではなく、傾向が異なる程度であることに注意する必要がある。

鮑戸氏は、さらにこの調査結果を因子分析して、コミュニケーション文化を規定する因子として「コミュニケーションへの一般的信頼」因子、「正確な表現志向」因子、「沈黙は金」因子、「ホンネとタテマエ」因子(日本)もしくは「思いやり」因子(アメリカ)とそれぞれ名づけられる因子を抽出した。この因子分析結果を検討したところ、「何年か付き合っていれば、相手の考えは、言われなくてもわかるようになるものだ」、「誠心誠意、あることをやっていれば、何も言わなくてもいつかは必ずみんなに理解してもらえるものだ」という2文は、本来「以心伝心」仮説の妥当性を検討するための文であったが、結果としてはコミュニケーションへの一般的信頼という軸(要因)を測定していたという。実際、文意を考えると「以心伝心」仮説はこの2文のような状態の説明として成り立ちうるが、たとえこの2文に回答者全員が同意したとしても、それが「以心伝心」仮説の正しさを証明することにならないと思われる。

3. コミュニケーション文化研究としての日米以外の比較の必要性和個人差の考慮の必要性

鮑戸氏のこの研究は、氏が言うところの「コミュニケーション文化」（コミュニケーション観、コミュニケーション習慣）について本格的な実証的考察をおこなったものとしてきわめて意義深い。しかしながら、ここからさらにコミュニケーション文化の考察を深めてゆくには、この稿の筆者としては次の2点の課題があると感じる。ひとつは、この研究が香港のデータを提示しながらも日本とアメリカだけを分析の対象としていることである。しかも、アメリカといっても調査対象の学生の文化的背景が同一であるかどうか不明である。鮑戸論文で検討された仮説は、いずれも日本とアングロサクソンのコミュニケーション文化の差を説明するための仮説であって、その仮説を検討するための調査の結果からは、他のコミュニケーション文化を規定する要因が抽出されるとは当然期待できない。本稿でとりあげる日本とイタリア、あるいは日本と中国でもよいが、それらの間のコミュニケーション文化の差を考える場合に検討すべき仮説としては、鮑戸氏の検討した仮説とは異なるものになるであろう。

もうひとつは、コミュニケーションへの考え方として日本人なら日本人全体の傾向というものがあるのは事実であろうが、個人による差も見逃せないという点である。日本人でも平均とはかなりズレた考え方の持ち主もいることは想像に難くない。むしろ、平均的な日本人そのものという典型的な日本人などいないのが現実であろう。文化差について検討する場合も、個人のふるまいを考慮する必要がある。個人によるコミュニケーション様式の変動の要因としては、年層差や地域差に基づくものもあれば、パーソナリティーに基づく差もある。帰り際にお茶づけでもと勧められても、それは断わることを前提としての引き留めるポーズにすぎないから真に受けてはいけないという「京のぶぶ漬け」は、京都が日本の他地域と異なる独自のコミュニケーション文化を有していることを示す。県民性として寡黙をあげる岩手県のようなところもある。また、個人によっておしゃべりな人もいれば、口数が少ない人もいる。ことば巧みにいつでも自分の要求を通してしまう人間もいれば、うまく自分が表現できないためにいつも他人の意思にふりまわされてばかりの人間もいる。日本対アメリカというような枠組みだけで比較する限り、当然こうした差には目がいかない。日本なら日本の中でのバリエーションの程度とその要因を把握した段階で初めて、何が日本の特徴かということが言え

るのではないか。

したがって、コミュニケーション文化一般について考察を進めようとするれば、日米だけの知識では不足で、いずれとも異なる文化と比較して見通しを広げることがまず必要である。同時に、調査結果もx国人の回答の合計とy国人の回答合計だけを基に結論を出すのではなく、個々の人間のふるまいにも注目し、全体としての傾向と回答者間変動の程度との関係を検討すべきである。

4. 日本・イタリア比較アンケート調査の目的と方法

そこで、本稿では日米のいずれとも相当コミュニケーション様式が異なると思われるイタリアをとりあげ、鮑戸氏のものと同様であるが、より多様な質問項目を設定して行ったアンケート調査の結果を報告する。

質問項目としては、鮑戸氏の抽出したコミュニケーション因子上での日伊の差を検討するための項目と、イタリア的と思われる特徴を検討するための項目合計27を設定した。イタリア独自のコミュニケーション様式については次節で述べる。鮑戸因子関連の質問としては、鮑戸氏の用いたオリジナルな質問文の他に、筆者がより適切であると考えた文や、個々に因子に関連するがやや異なる内容を問う項目を加えた。個々の質問の設定の意図については、結果の分析の章で述べる。

回答は、質問文の内容によって「そのとおりだと思う」「まあそうだと思う」「あまりそう思わない」「全然そう思わない」の4段階か、「いつでもそうする」「よくそうする」「ときどきそうする」「たまにしかそうしない」「全然そうしない」の5段階の選択肢を用意し、このうちからひとつを選んでもらった。質問によっては4段階の選択肢から「思う」「思わない」という表現を取り去ったり、「非常に～」「まあ～」「あまり～ない」「全然～ない」という表現にした場合がある。5段階の選択肢も「いつでもそうなる」「よくそうする」等の表現に替えた場合がある。

アンケートの回答者は47名の日本人と50名のイタリア人である。日本人回答者の内訳は、男12・女35、平均年齢24.7才 (sd: 8.2)、うち30名が大学生である。47名のうち32名が近畿地方の生育、他は東北から九州まで生育地は様々であるが、西日本に偏っている。調査当時は全員が大阪に2年以上居住する。全体としては関西文化圏のコミュニケーション文化を強く反映する回答になるであろう。本来ならば近畿なら近畿で統一すべきであろうが、以下

での分析にはイタリア人回答者の数とのバランスを考慮して近畿以外の出身の回答者も含めることにした。イタリア人回答者の内訳は、男10・女40、平均年齢25.1才 (sd : 7.9)、うち40名が大学生である。出身地は18名が中部のトスカーナ州、8名が中南部ラツィオ州、11名が北東部ベネト州、他は北西部、南部、シチリア島と全国にわたる。イタリアの文化は地域による差が日本以上に大きいと思われるが、出身地が適度に分散しているので、アンケート結果全体としては特定の地方的特性に偏らないもの、すなわち、汎イタリア的な特徴があるとすればそれを反映した回答であると期待される。なお、年齢的には両国とも主に若年層のデータであるから、伝統的なコミュニケーション文化をどの程度反映しているかについては問題を含む。また、両国とも圧倒的に女性回答者が多い。この2点については今後の解決課題としたい。

アンケートは日本人回答者についてはすべて回答者の居住地である大阪で行なった。イタリア人回答者についても回答者の居住地、すなわちフィレンツェ (主にトスカーナ出身者)、ローマ (主にラツィオ出身者)、パドバ (主にベネト出身者) で行なった。アンケート用紙は筆者自身が作成したイタリア語版のもの (付録参照) を用いた。イタリアでのアンケートについて、齊藤圭子、Emanuela Magno Caldognetto、鷲山郁子、松永幸喜の各氏の協力を得た。

5. 日本とイタリアのコミュニケーション文化の差についての仮説

筆者は、平均的イタリア人の言語コミュニケーション様式の特徴として、次の3点を考えている。

ひとつは、イタリア人は自分の言いたいことを相手に理解させ、また相手の言おうとすることを自分が理解するためには、平均的日本人あるいはアメリカ人以上の努力をするのではないかということである。特に、自分の言いたいことを理解させるための努力というか執念深さには驚かされることがある。「もう十分あなたのおっしゃることはわかりました、もう結構です」というぐらい相手の話を聞いたと聞き手は思っているのに、話し手はまだ聞き手の理解度に不安なのか、なお自説を展開し続け確認を求めようとするのが稀ではないと思う。外国人相手のときはこの傾向がいっそう顕著に現れるように思う。日本ならこちらの言い分を聞き手が理解しているかどうか多少自信がなくても、面倒くさくなってそのままにしておくことが多いと思うし、逆に、相手の言うことがあまりわからなくてもそのまま話を続け

させるということも少なくないのではないか。この傾向もやはり相手が外国人の場合著しいように思う。他者の理解ということについては、イタリア人にも一方的に自分の意見を主張し相手に耳を貸さないような人間がいることは確かで、すでに16世紀の有名な作法書Galateoにもそれへの戒めが見られる。しかし、こちらがぜひ伝えたいと思うことに対しては、ああこうかと先取りして口に出してみてくれるということが多いように思う (ただしGalateoはこのような態度はうぬぼれであり反感を買おうと戒めている)。イタリア人は自分がわからないまま相手にひとりでしゃべらせておくということはしない。そのため、少ししかイタリア語ができない外国人にとっても意思疎通は比較的楽であり、しかもしゃべる量が多くなるから速くうまくしゃべれるようになれるように思う。この点、アメリカとフランスでは、拙いしゃべりかたでは店に買物に行っても相手にもしてくれないという、イタリアとは対照的な印象がある。日米伊だけでなく一般にコミュニケーション文化を規定する要因として、コミュニケーション成立への努力の程度ということを考えて良いと思う。

2つめは、しゃべることと書くことへの態度の違いである。日本では、誤字脱字や手紙のこまごまとした作法はやかましく言われても、話し方の作法や話術についてはほとんど意識されていない。うまく話す技術や透る声を出すような訓練よりも、きれいに書く技術や形式に則って書く訓練が重視されているわけである。一方、イタリア人には古典的教養を持つことへの憧れがあり、知識人なら自らも格調の高い文章を書こうとする意識がある。手紙の作法も日本ほどではないにしろ結構うるさい。その意味では書く技術は重視されていると言えるが、日本のような文字偏重はまったくない。むしろ、イタリア人の書く字はきわめて個性的であり、文脈がなければイタリア人でさえ解読できないというような字にしばしば遭遇する。しかし、格調高さを求める傾向は、パブリック・スピーキングにおいてはある程度反映されているのではないかと思う。日常のコミュニケーションでもそうだとはいえずも言えないが、日本に比べれば話術についてのこだわりがあるように思う。現代のある作法書は「会話が繊細で巧妙なひとつの技能であった時代はすでに過去のものとなってしまった」と嘆いているが、これなども話術へのこだわりが捨てきれないからであろう (Ostan, 1990)。

最後のひとつは、おしゃべりの役割に関してである。イタリア人の国民性として様々言われるなかに、イタリア人はおしゃべりだというものがある。

日本人からみると特に男性のおしゃべりが目をひく。しかし、これはイタリア人が単に口数が多いということではなく、イタリアではおしゃべりが人をもてなすための重要な手段としてかなり意識的に用いられているからではないか。イタリアの作法書は古今を問わずおしゃべりをいましており、過度のおしゃべりが悪印象を起こさせるのは日伊とも変わりがなさそうだが、適度におしゃべりな人への評価は悪くないと思う。むしろGalateoは無口な人間を評価していない。それはおしゃべりが日本とはやや異なる役割をもっているからではないか。

6. アンケートの結果と分析(1) : 単純集計結果と回答間の相関

表1に日本語版の質問文と回答を示す(イタリア語版は省略)。回答は%で表示した。各問に対する結果の最下段に、回答の平均値と、日伊間の平均値の差の有意度を示した。平均値は、4段階の程度尺度については「そのとおりだと思う」を4、「まあそうだと思う」を3、「あまりそう思わない」を2、「全然そう思わない」を1、そして5段階の頻度尺度については「いつもそうする」を5、「よくそうする」を4などと、回答選択肢を等間隔尺度と見たてて計算したものである。表2および表3は、設問どうしにどの程度の関連があるかを日本人とイタリア人回答者ごとに積率相関係数で示したものである。

6. 1. シャベることと書くことへの態度: 問1・2

アンケート最初の2問は、シャベることと書くことへの態度の違いを見るための質問である。結果はほぼ仮説どおりとなった。

問1「うまくしゃべれるようになりたいですか」については、両国の回答者ともほとんどが「そのとおり」か「まあそう思う」のいずれかを選択しているが、イタリア人回答者の方が日本人回答者より「そのとおり」がずっと多く、賛成の度合いが強くなっている。「そのとおり」と答えたのは日本人は約半数、イタリア人は8割で、平均値にも有意差がある。

一方、問2「きれいな字を書きたいと思いませんか」については、日本人回答者は8割近くが「そのとおり」と考え、「まあそうだ」を加えればほとんど全員が肯定的である。ところが、イタリア人は「そのとおり」は3割強に過ぎず、そう思わないという否定的な回答も2割ほどある。このように、両国の差はかなり大きい。

問1と問2の回答を比較すると、日本人はしゃべるうまさよりも字のきれいさを望む気持ちが強く、逆にイタリア人は字よりも話のうまさを望んでいることがわかる。回答者別に見ると(表省略)、イタリア人はほぼ半数にあたる24名が字のきれいさよりも話のうまさをより強く望んでいるのに、逆は1名に過ぎない。日本人の場合、字より話を重視するのは47名中3名で、逆は9名である。

結局、日本人はうまくしゃべりたいと思わなくはないが、それよりも字がきれいであることを重視する。逆に、イタリア人はうまくしゃべることは望むが、字の方は問題としていないわけである。すなわち、両文化で大きく異なるのは字に対する考え方である。

6. 2. コミュニケーションによる相互理解への精力的な努力: 問3・4

この2問は、コミュニケーションによる相互理解への精力的な努力の有無を尋ねたものである。

結果は仮説を裏付けるもので、問3「自分の言いたいことを相手がなかなかわかってくれなければ、わからせるよう努力しますか」についても、問4「相手の言いたいことがなかなかわからなときは、わかるよう努力しますか」についてもイタリア人の方が圧倒的に強く賛成している。イタリア人はどちらの問に対しても「いつでもそうする」という回答が7割あるのに対し、日本人はわずか2割にすぎない。ただし、日本人でも「たまにしか」あるいは「全然しない」という否定的な回答はほとんどない。

この2問への回答パターンは日伊ともかなり似ている(相関度は日本人が $r=.584$ ($p<.001$)、イタリア人が $r=.639$ ($p<.001$)。つまり、日伊とも自分を理解させるために努力する人間は相手を理解するための努力をし、理解させる努力をしない人間は理解する努力もしないというわけである。「欧米人は自己主張のみが強い」という説がある。このアンケートは意識調査であるので、実際にどの程度努力をしているかはわからないが、少なくとも意識の上では、イタリア人は自己主張だけして相手の言うことに耳を貸さないというわけではない。

6. 3. おしゃべりの役割: 問5~13

問5「おしゃべりすることは好きですか」は、イタリア人饒舌説に関連する質問である。結果を平均値でみれば限り日伊の差はない。両国ともほとんど

の回答者が「非常に好き」か「まあ好きだ」のいずれかを選んでる。ただしイタリア人の方が「非常に好き」が多い。おしゃべりの量を実際に測定した調査結果ではないから、日本人に比べてイタリア人がおしゃべりだとは言えないが、イタリアには非常なおしゃべり好きがやや多いということは言えそうである。

問6「非常に疲れたときでも、友人とおしゃべりをすると元気になりますか」は、しゃべることが活力源になっているように見受けられる人がイタリアには多い印象があったので設定した質問である。しかし、やはり平均値では日伊間の有意差はないという結果になった。ただし回答は「いつでも」から「全然」まで比較的分散している。おしゃべりで元気になるかどうかは個人の問題だということであろう。

問7「おしゃべりすると疲れますか」は前問に似るが、質問設定の意図としてはやや異なる。おしゃべりで疲れない人でも、おしゃべりをして元気になるとは限らないからである。回答には問6の場合と異なり日伊の差が出た。イタリア人回答者には「全然疲れない」という回答が多いのである。

問5、6、7の結果を総合すると、イタリア人は日本人に比べて非常に精神的におしゃべりし、それで疲れることはないが、必ずしもおしゃべりが活力の源になっているわけではないということになる。

一方、この3問相互の関連を見ると、日本人のおしゃべり好きはおしゃべりで疲れることはなく（問5と7： $r = -.377$, $p < .01$ ）、疲れてもおしゃべりすると元気を取り戻す傾向がある（問5と6： $r = .447$, $p < .01$ ）。あたかもおしゃべりが活力源となっているかのようだ。これは、おしゃべり好きな日本人はおしゃべりで容易にストレス解消できるということではないだろうか。

一方、おしゃべりで疲れる日本人は、そもそもあまりおしゃべり好きでないが、疲れた時におしゃべりしても元気にならない傾向がある（問6と7： $r = -.361$, $p < .05$ ）。これは一見当然のように見えるが、イタリア人はそうではない（ $r = -.102$, n.s.）。おしゃべりで疲れる日本人は、コミュニケーションを重荷に感じている人たちではなかろうか。なお、イタリア人の場合、おしゃべり好きであることは、おしゃべりで元気になることも疲れることも関連が薄い（問5と6： $r = .099$, n.s.、問5と7： $r = -.238$, n.s.）。

問8「非常に疲れたときや身体の調子が悪いとき、誰ともしゃべりたくないことがありますか」は問6に似るが、コミュニケーションが重荷である人の割合を調査するためのものである。結果は問6と同じで、平均値に日伊間

の有意義は認められず、比較的回答が分散している。疲れたらしゃべりたくなくなるのが常だというくらいコミュニケーションが重荷な人は1割程度である。

問6との関連を見ると、日本人が $r = -.578$ ($p < .001$)、イタリア人が $r = -.679$ ($p < .001$)といずれも非常に強い。コミュニケーションが活力源であるか重荷であるかは、個人差が大きいことを示唆している。

コミュニケーションが重荷であり誰ともしゃべりたくない人は、問9「ほとんど一日誰ともしゃべらないことがありますか」に肯定的な答をするであろう。ただし、おしゃべり好きではないが必要ないつもしゃべらざるをえないとか、あまりしゃべらないが本当はおしゃべりが好きだという場合もある。その意味では問9もやはり問5「おしゃべりすることは好きですか」と関連づけて考える必要がある。結果としては、しゃべらない日があるかどうかについて日伊の差はない。ほとんどは否定的な回答である。ただし、イタリア人の方が「全然ない」が少ない。これはやや意外な結果である。もっとも、実際にしゃべっている量は結構あるのに、本人の充足感がないために「ほとんど一日誰ともしゃべらないことがある」と考える回答者もいるであろうから、この答はしゃべらない頻度ではなくて充足感の有無を表わしているに過ぎないかもしれない。その場合、おしゃべりに充足をあまり感じていないイタリア人がやや多いということになる。

問9と問5との関連を見ると、興味深いことに日本人回答者では $r = -.622$ ($p < .001$)と相当関連深いのに（すなわち、問5で「しゃべり好き」と答えた回答者はこの問では「しゃべらない日はない」と答える、あるいは「しゃべらない日が多い」人は「おしゃべり好きではない」と答える）、イタリア人回答者の場合は予想に反して $r = -.069$ (n.s.)と、まったく関連がない。やはりこれはおしゃべり好きでしゃべる欲求が強いのに、実際にはそれが十分に満たされていないイタリア人がかなりいるということではないだろうか。イタリア人には淋しがり屋が多く、孤独であることやひとりであることを避けようとする傾向が日本人よりも強いように思う。問9と5の結果は、イタリア人のコミュニケーション充足感の低さを物語っているように思える。

問10「友達が身体の具合が悪いときや元気がないとき、おしゃべりをして気をまぎらわせたり元気づける努力をしますか」は、もてなしの手段としてのおしゃべりの重要性を検討するための質問である。問6とは違って、実際に元気になるかならないかという効果ではなく、そうした努力をするかど

うかという点を聞いている。結果も問6とは違って日伊の明瞭な差が出た。イタリア人は半数が「いつでも努力する」のに、日本人の半数は「ときどきする」だけなのである。この回答はイタリアでおしゃべりが広い意味でもてなしの重要な手段になっていることを示唆すると同時に、イタリア人がコミュニケーションに精力的な努力を傾けることの表われでもあると思う。問5のおしゃべり好きかどうかを問う質問との関連がイタリア人はかなり高いが ($r=.403, p<.01$)、このことも、イタリア人が単に口数が多いのではなく、重要なもてなしの手段としておしゃべりを活用していることを思わせる。

問11「お客さんを家に食事に招くとき、会話がはずむようにも気を配るべきだと思いますか」も、イタリアでおしゃべりがもてなしの重要な手段になっていることを示そうとした質問である。しかし、結果としては日本人も「そのとおり」という回答が多いためイタリア人との差が出なかった。

問12「(仕事以外で) 初対面の人と話こむことはよくありますか」については、イタリア人の方がずっとそうすることが多いという結果になった。日本人の回答は否定的な方へ傾いている。問5 (しゃべり好きの程度を問う) との関連を見ると、日本人は $r=.187$ (n.s.) と低い、イタリア人は $r=.396$ ($p<.01$) と決して低くない。どうやら、日本人がおしゃべり好きだとしてもそれは特定の知人を念頭に置いているのであって、初対面の人とのむやみなおしゃべりはしないということではないか。実際、日本では家族や友人以外の人物とは必要なこと以外なるべくしゃべらないですまそうとする傾向が強い。一方、イタリアの場合はおしゃべり好きな人は相手をあまり選ばないのではないか。

問13「誰かといっしょにいるときに話がしばらくとぎれると気まずいですか」は、仮説どおりおしゃべりが重要なもてなしの手段であるならば、話のとぎれた場合には気まずく感じるのではないかと考えたための質問である。もっとも、仮に気まずく感じるという回答が多くても、それだけで仮説が支持されるわけではない。もし否定的回答であれば仮説は不利になるという程度である。結果として平均値では日伊の差はないものの、日本人の7割が肯定的意見であるのに対し、イタリア人は賛否半々である。

問13と回答パターンに関連がある質問を探すと、あまり高い関連とは言えないが、日本人のみ問27「本当はすべきことだが、あるいは相手はしたそうだが、自分はいやだという場合、自分がいやだと思っていることを明言します

か」との逆相関がある ($r=-.311; p<.05$)。すなわち、話がとぎれて気まずい日本人は、ホンネを言わないという傾向がある。これは、話がとぎれて気まずい日本人は、もてなしにならないから気まずいというよりも、相手が自分のことをどう思っているかを神経質なまでに気にしながらしゃべっているということではないだろうか。

ここで、おしゃべりの役割に関する以上の9問への回答とそこから得られた考察をまとめると次のようになる。まず、平均すれば日伊のおしゃべり好きの程度に差はないが、イタリア人には非常なおしゃべり好きがやや多い。平均的なイタリア人はしゃべっても疲れるということがあまりなく、初対面の人とも気軽に話し込む。それは彼らのコミュニケーション欲求が強いからであると思われるが、現実にはその欲求は十分に満たされていないようだ。一方、日本では初対面の人と気軽に話し込むことは少なく、おしゃべり好きだとしてもそれは特定の知人のおしゃべりのようである。ただ、そういう人にとってはおしゃべりは活力源であり、ストレス解消の重要な手段となっていると考えることができる。これとは逆に、しゃべることを重荷に感じている人が日本にもイタリアにもいる。イタリアでおしゃべりがもてなしの重要手段として活用されているという仮説については、これをテストするための4問のうち、仮説に有利な結果が得られたのは1問だけで、他は棄却もしないが積極的な支持もしない結果となった。もてなしとしてのおしゃべりの役割に日伊で大きな差がないという解釈は可能だが、設問の見直しも含めてさらに検討を続けたい。

6. 4. 鮑戸因子の有効性検討のための質問項目およびその補充質問項目： 問14~27

鮑戸因子上での日伊の相違を検討するための質問としては、鮑戸氏の用いたオリジナルな質問9問のうちから2問を除いた7問と、鮑戸氏の立てた個々の仮説に関連するが、鮑戸質問とはやや異なることを聞くために新たに設定した7問、計14問を用いた。鮑戸質問から削除した2問は、本来「以心伝心」仮説を検討するために設定されたものの、結果的にこの仮説を検討したことにならなかったとされる「何年か付き合っていれば、相手の考えは、言われなくてもわかるようになるものだ」、「誠心誠意、あることをやっていれば、何も言わなくてもいつかは必ずみんなに理解してもらえるものだ」である。なお、本アンケートで使用した鮑戸質問については、各質問文の最後に「～

と思いますか」あるいは「～ですか」という原文にはない表現を加え、また、いくつかの質問については、イタリア語へ翻訳した場合の文構造上の一致をなるべく保つために、そして質問の意味が通じやすいように、原文の意味をそこなわないと考えた範囲で表現を改めたものがある。具体的には、問14「どんなことでも時間をかけて話しあえば、お互いに理解しあえると思いますか」は鮑戸原文冒頭の「人間は」を削除したものであり、問19では鮑戸原文の「口頭や電話での話は信用できないので、文書にして伝達するか、確認すべきだ」を「重要なことがらは、口頭や電話ではなくて、文書や手紙で伝達したり確認すべきだと思いますか」に変えた。また、問21では原文の「会合などで何もしゃべらない人でも、特に意見をもっていないとは限らない」の後半部を「会合などで何もしゃべらない人でも、意見を持っていると思いますか」とし、問25では原文の「ウソも方便と思う」は「時として、嘘をつくことも方便として正当化されると思いますか」と言い換えた。この最後の質問については、鮑戸論文には説明がないが、同氏の英語版の質問文でもこれに近い言い替えがなされているのではないと思われる。このほか、原文の漢字をかなに直すなど、表記を改めた箇所がある。表1では、鮑戸質問について鮑戸アンケートの日本人回答者の結果も併記した。

「以心伝心」仮説を検討する質問としては、より適切ではないかと考えた質問（問16「あまりしゃべらなくても自分の言いたいことを何でも推察してわかってくれるような友人がいれば良いと思いますか」）を用いた。

なお、回答の選択肢は鮑戸アンケートでは「まったくそうだ」「まあそうだ」「あまりそうでもない」「全然そうでない」であり、本アンケートの「そのとおりだと思う」「まあそうだと思う」「あまりそう思わない」「全然そう思わない」とはやや表現を異にする。

以下では、鮑戸氏の研究で抽出された因子ごとに回答を検討する。

6. 4. 1. 「言語（コミュニケーション）への信頼性」の因子関連の質問

問14「どんなことでも時間をかけて話しあえば、お互いに理解しあえると思いますか」（鮑戸質問）は、相互理解の手段としてのコミュニケーションの役割を問う質問である。本アンケートの日本人とイタリア人の回答の平均値に有意差はない。大半は「まあそうだと思う」か「あまりそう思わない」と積極的な賛成反対は少ない。ただし、イタリア人の方が「まあそうだと思う」人が2割程多い。本アンケートの日本人と鮑戸アンケートの日本人の回

答は、ほぼ一致している。

問15「人が何を考えているかを理解するためには話をする必要があると思いますか」も設定意図は前問と同じである。ただし、前問が「話せばわかる」かどうかを聞いているのに対し、この質問はその裏命題として「話さなければわからない」かどうかを問うものである。結果は、日伊とも半数以上が「そのとおり」と回答し、両国の差は出なかった。もし前問でも強い賛成があったならば、相互理解のためには言語コミュニケーションが必要かつ十分ということになり、言語コミュニケーションへの信頼は非常に強いことになったであろうが、結果としてそうはならなかった。結局、日伊とも相互理解のためには話をする必要があることは認めるが、話をしたからといって必ず理解できるとは限らないと思っているという、いわば常識的な回答となった。ただし、問14と15の両質問への回答パターンの関連度はイタリアだけが非常に高いことから（日本人： $r=.000$, n.s.、イタリア人： $r=.556$, $p<.001$ ）、話さなければわからないと思うイタリア人は、話せば結構わかると思うようだ。

問16「あまりしゃべらなくても自分の言いたいことを何でも推察してわかってくれるような友人がいれば良いと思いますか」は「以心伝心」仮説の妥当性検討のために設定した質問である。もし賛成が少なければ「以心伝心」はあてはまらないはずである。結果としては、日伊ともほとんど「そのとおり」か「まあそうだ」と回答しており、両国の差は出ず、これだけでは仮説の妥当性はわからない。

この問と前問の関連は日伊ともある程度高く（日本人： $r=.345$, $r<.05$ 、イタリア人： $r=.440$, $p<.01$ ）、何でも推察してわかってくれる友人が欲しい人が同時に話さなければわからないと思う傾向がある。逆に、何でも推察してわかってくれる友人など要らない人は相互理解の手段としての言語コミュニケーションの役割に否定的である。これらは一見矛盾する態度である。この解釈として、日伊とも人間間の相互理解に積極的な回答者と消極的な回答者がいるためであると見ることもできるかもしれない。

以上、「言語（コミュニケーション）への信頼度」については日伊に差があるようには思えず、鮑戸アンケートのアメリカ人の回答と比べても、大きく異なるとは思えない。

6. 4. 2. 「明確な表現への志向」への因子関連の質問

問17「非常に明らかだと思えることはわざわざ口に出して言う必要はないと

「思いますか」では日伊の回答者とも「まあそうだ」「あまりそう思わない」という中庸の回答がほとんどで、平均値も差がない。

問18「いくらわかっていることでも、ちゃんとことばに出して表現してもらわなければ安心してできませんか」（鮑戸質問）についても、日伊ともに「まあそうだ」「あまりそう思わない」という中庸の回答がほとんどで、平均値も差がない。また、鮑戸アンケートの日本人の回答パターンとの差もなさそうである。鮑戸アンケートではアメリカ人の賛同率はやや高い。この問は前問の否定命題であるにもかかわらず、前問との回答パターンの相関はない（日本人： $r=-.218$, n.s.；イタリア人： $r=.020$, n.s.）。問17、18とも積極的な賛成反対がないことは、日伊とも口に出して言うかどうかは内容次第ということであろうか。

問19「重要なことがらは、口頭や電話ではなくて、文書や手紙で伝達したり確認すべきだと思いますか」（鮑戸質問）についても日伊の差は出なかった。回答はかなり分散しており、個人によって考え方が大きく違うようである。鮑戸アンケートの日本人の回答とも差はなさそうである。

問20「あなたは、わかりやすく話す努力をしていますか」については、日伊に対照的な差がある。イタリア人は半数以上が「いつでもそうする」のに対し、日本人は「いつでもそうする」回答者はほとんどなく、半数は「よくそうする」とした。

問17、18、19の回答を総合すると「明確な表現への志向」に日伊の差があるとは思えないから、問20の結果は、イタリア人の明確な表現への志向の反映というよりも、6.3節で確認されたようなイタリア人のコミュニケーション成立への精力的な努力の反映と考えた方が良いように思われる。

6.4.3. 「沈黙は金」因子（巧言令色鮮仁）関連の質問

問21「会合などで何もしゃべらない人でも、意見を持っていると思いますか」（鮑戸質問）では、イタリア人の方が強く賛成する結果となった。実に7割が「そのとおり」と答えている。日本人は「そのとおり」と「まあそうだ」が相半ばする。鮑戸アンケートの結果と比較すると、イタリア人のこの意見への賛同度はアメリカ人よりもなお大きいようである。鮑戸アンケートの日本人回答者と本アンケートの日本人回答者には差はなさそうである。この結果は、一方ではイタリア人は意見があっても発言しない（できない）ことが多いことを示唆し、他方では誰でも当然意見はもっているとの意識がイ

タリア人には強いことを示唆する。

問22「あまりたくさんおしゃべりする人間にろくなものはないと思いますか」（鮑戸質問）では日伊の平均値の差は認められない。鮑戸アンケートの日本人の回答とも変わらないようである。回答は分散しているが、否定的意見が日伊とも6～7割を占めている。このように、日伊とも寡黙を重視しないという結果となった。もっとも、鮑戸アンケートでは香港の寡黙重視傾向が強く（半数が「まあそうだ」）、日本、アメリカと差をつけている。やはり巧言令色鮮仁の伝統が色濃く残っているのであろうか。

問23「あまりしゃべらない人間は信用できると思いますか」は、前問の裏がえしに近いが、寡黙に対する評価がその人への信用度と結びつかないかと考えて設定した質問である。ここでは前問と異なって、日伊の差が出た。イタリア人の方がやや高い信頼度を置いているのである。しかし、差はさほど大きくない。

問24「重要でないことはしゃべらない方がよいと思いますか」は、寡黙重視傾向があるとすれば、それが話題の一般的重要性と関連するかどうかを見るつもりでの質問であったが、一般的重要性か場面的重要性かがはっきりしない質問文になってしまった。結果は、日伊とも半数が「あまりそう思わない」で、平均値も差がない。

以上のように、「沈黙は金」かどうかについては、寡黙を特に重視する傾向は日伊とも見られない。回答相互の関連を見ると、日本人の問22と24に対する回答どうしの正の相関（ $r=.374$, $p<.01$ ）がめだつ。日本では一言居士的態度の持ち主とそうでない人に別れるということであろうか。

6.4.4. 「ホンネとタテマエ」因子～「思いやり」因子関連の質問

問25「時として、嘘をつくことも方便として正当化されると思いますか」（鮑戸質問）については、本アンケートの日本人回答者とイタリア人回答者の間にきわめて対照的な差が出た。さらに、本アンケートの日本人回答者と鮑戸アンケートの日本人回答者にも著しい差が出た。本アンケートの日本人回答者の半数は「そのとおり」、残りの大部分も「まあそうだ」と賛成がきわめて多く、ホンネとタテマエをはっきり区別している。一方、イタリア人は半数が否定的な意見で、強いホンネ志向である。ところが、鮑戸アンケートの日本人回答者は「まったくそうだ」は2割に過ぎずホンネ・タテマエ区別志向はさほど強くない。鮑戸論文では「まったくそうだ」への回答がアメ

リカより日本の方が5～8%多いデータをもとに、日本では「ウソも方便」と考えられているという仮説は「それほど顕著ではないが、仮説どおりの差異が確認された」としている。しかし、本アンケートの日本人回答者と飽戸アンケートの日本人回答者の差の方が、飽戸アンケートの日米の差よりもはるかに大きい。

なお、イタリア人の賛成度は飽戸アンケートのアメリカ人のものよりさらに低い。現代イタリアの作法書に、嘘も方便として必要との忠告があるが(Sotis, 1986)、むしろこれはそのように考えている人が少ないからであろうか。

日本人で回答者群間に差があることの解釈としては様々考えられる。まず質問文がやや異なることがある。飽戸氏の原文は「ウソも方便と思う」と格言そのままであり、命題として強い印象を与えるために極端な賛成反対の反応が出ず、控え目な反応になったということが考えられる。次に考えられるのが地域差と性差である。本アンケートの回答者は大阪在住、しかも多くが近畿出身の女性、これに対し飽戸アンケートはほとんどが東京在住の男子学生という違いがある。しかし、こうした点は今後の研究課題としなければならぬ。

問26「人はいつも本当のことを言っているとは限らないのだから、いつも真意を見抜くよう努力すべきだと思いますか」(飽戸質問)についても前問同様で、本アンケートの日本人回答者とイタリア人回答者の間、そして本アンケートの日本人回答者と飽戸アンケートの日本人回答者に差が出た。日本人どうしを比べると、本アンケートの回答者の方が飽戸アンケートの回答者よりも否定的な意見が多く、やはりあまりホンネ追求にはこだわらないようである。ところが、イタリア人はこのいずれよりも、また飽戸アンケートのアメリカ人よりも積極的な肯定意見が多く、やはりホンネ追求志向が強いと言えるだろう。

問27「本当はすべきことだが、あるいは相手はしたそうだが、自分はいやだという場合、自分がいやだと思っていることを明言しますか」についても日本人回答者とイタリア人回答者の間の差が認められる。ここでは「明言すべきかどうか」を尋ねているのではなくて回答者自身の実状を聞いているわけだが、イタリア人の方が自分は明言することが多いと意識している。実際、現代作法書にも一般に女性と地中海周辺の男性は自分の気持ちを控え目に言うということあまり知らないという記述がある(Sotis, ibid)。ただし、

問21の回答を考慮すると、強いホンネ志向のイタリア人でも常に思ったとおりを口に出しているわけではないようだ。

イタリア人回答者にはこの問27と問16「あまりしゃべらなくても自分の言いたいことを何でも推察してわかってくれるような友人がいれば良いと思いますか」との相関がある($r=.430$; $p<.01$)。すなわち、ホンネ志向のイタリア人でも、何でも推察してわかってくれる友人を欲しがるとの傾向がある。このことは、ホンネ志向とはいっても相手ときびしく対立することまでは望まないということであろうか。

問25、26、27への回答をまとめると、本アンケートの日本人回答者にはホンネとタテマエを区別する傾向が強く、イタリア人回答者のホンネだけの表現志向と対象的である。

以上の飽戸アンケート関連の質問への回答をまとめると、「言語(コミュニケーション)への信頼性」、「明確な表現への志向性」、「『沈黙は金』と思うか」には日伊で差があるとは思えない。しかし「ホンネかタテマエか」については、日本人ホンネ・タテマエ区別志向とイタリア人のホンネ表現志向が明瞭に出た。

7. アンケート結果の分析(2): 回答者の個人差を考慮した分析

ここでは、「クロス集計の数量化」(柳井・高根1977)の手法を用いて、日伊の回答者計98名と27の質問という2変数の間の相関係数が最大になるように重みづけをして質問と回答者の配列を同時に並べかえることで、個々の回答者間の関係を数量化することを試みた。その結果、大きい固有値(相関係数の高さに対応)ではないものの、第2軸(2番めに高い相関関係を示す並べ方)で日伊各々の回答者は明瞭に分離された。相手文化の領域に食い込んだ回答者は10名、全体の1割に過ぎない。イタリア人のような回答をした日本人回答者、日本人のような回答をしたイタリア人については、地域、年齢に共通性や特別な事情は見あたらず、固有のパーソナリティによるものと推測される。

なお、第1軸では、日本人の6名のみが独特な回答パタンのために他の92名から分離している。

図1に第1軸と第2軸上の個々の回答者の位置づけを、日本人回答者は黒丸で、イタリア人回答者は白抜き丸印で示した。

第2軸で日本人らしさとイタリア人らしさを分けている質問項目の特徴を

見るために、この軸上での質問と回答者の配置によるクロス表を作成した(表4)。表では「そのとおりに思う」「まあそうだと思う」あるいは「いつでもそうする」「よくそうする」という肯定的回答を併せて黒丸で、「あまりそう思わない」「全然そう思わない」あるいは「たまにしかそうしない」「全然そうしない」という否定的回答を白抜き丸で示した。また、回答者の所属文化は回答者番号の前のi、jの記号で識別し、さらに日本人回答者は回答者番号の左にアスタリスクをつけて示した。

表4から、本調査の日本人らしさを特徴づけているのは主に問7、25、13への肯定的回答と、問10、20、26への否定的回答であることがわかる。逆に、主に問7、25、13への否定的回答と、問10、20、26への肯定的回答は、イタリア人らしい回答である。すなわち、おしゃべりすると疲れ、話がとぎれると気まずく、ウソも方便と考えるのは、日本人らしくイタリア人らしくない態度である。一方、友達の調子が悪いときにはおしゃべりで元気づける努力をし、話すときにはわかりやすく話す努力をし、真意を見抜くよう努力すべきだと思うのがイタリア人らしく日本人らしくない態度ということになる。言い換えると、日本人とイタリア人を分けるいちばん大きなポイントは、ホンネによるコミュニケーション成立への精力的な努力の有無ということになる。

第1軸で日本人の6名が他の回答者と異なる理由について、第2軸の場合と同様の手続きで検討すると(図省略)、この6名の回答には、たくさんおしゃべりする人間にろくなものはおらず、重要でないことはしゃべらない方がよいと思い、おしゃべりすること自体も好きでなく、疲れたときに友人とおしゃべりをしても元気にならないという反応が比較的集中しているからである。すなわち、この6名はおしゃべりに対する否定的態度の持ち主と言えるかもしれない。この6名は地域、年齢のいずれを見ても共通性は見あたらず、おそらくは無口で対人コミュニケーションを重荷に感じるというパーソナリティの持ち主と思われる。

以上のように、個人差を考慮した分析からは、個人の回答の仕方を規定している要因として文化的背景と同様に個人のパーソナリティも重要であることが確認されたと言えよう。

8. まとめ

アンケート回答の単純集計結果と、回答者の個人差を考慮した「クロス集

計表の数量化」分析の結果を総合すると、日本とイタリアのコミュニケーション文化の差は、何と言ってもコミュニケーション成立へむけての精力的な努力の有無である。したがって、研究の出発点となったイタリア人のコミュニケーションに対する態度についての仮説のうち、「自分の言いたいことを理解させ、また相手の言おうとすることを理解するために努力をおしまない」の妥当性は支持される。「字のうまいへたには無頓着だが、話術にはこだわりがある」という仮説についても、これに沿う結果が得られた。しかし、「おしゃべりが人をもてなすための重要な手段として意図的に用いられている」仮説については、明確な支持は得られなかった。

このほか、おしゃべりの役割を問う質問への回答の分析から、平均的なイタリア人はコミュニケーション欲求が強いらしいこと、しゃべっても疲れるということがあまりなく、初対面の人でも気軽に話し込むが、現実にはその欲求は十分に満たされていないようであること、そして日本では初対面の人と気軽に話し込むことは少なく、おしゃべり好きだとしてもそれは特定の知人とおしゃべりのようであることが推察された。しかし、その一方ではしゃべることを重荷に感じている人が日本にもイタリアにもいるようである。コミュニケーションに対する態度として、文化的背景と同様に個人のパーソナリティも重要であることが確認される。

鮑戸氏が抽出した日米のコミュニケーション文化を規定する因子上での日伊の相違を検討するための質問からは、「言語(コミュニケーション)への信頼性」、「明確な表現への志向性」、「沈黙は金」には日伊で差があるとは言えないことがわかった。しかし、「ホンネかタテマエ」については、日本人ホンネ・タテマエ区別志向とイタリア人のホンネ表現志向が明瞭に出た。ただし、同時に本アンケートの日本人回答者と鮑戸アンケートの日本人回答者では振舞いが相当異なることもわかった。日本人どうしのこの差については、地域差か性差か、その他の要因があるかについては今後の検討課題としたい。

文献

- 鮑戸弘「コミュニケーション文化の日米比較」. 辻村明・水原泰介(編)
『コミュニケーションの社会心理学』. 東京大学出版会. 1984. 209-226.
柳井晴夫・高根芳雄「多変量解析法」. 朝倉書店. 1977.
Della Casa, Giovanni: Galateo ovvero de' costumi. 日本語訳「ガラテ
オ(よいたしなみの本)」デッラ カーサ著・池田廉訳. 春秋社. 1961.
Sotis, Lina: Cose da sapere, Mondadori. Milano. 1986.
Ostan, Meta: Guida al Galateo moderno, Mondadori. Milano. 1990.
Majello, Carlo: L'arte di comunicare, Franco Angeli. Milano. 1990
(16版).

表1. コミュニケーション文化に関するアンケート結果

日本人47人、イタリア人50人の回答(%)

1. うまくしゃべれるようになりたいですか

4	[日本人	55	-	80	イタリア人]	そのとおりだ
3	[日本人	36	-	16	イタリア人]	まあそう思う
2	[日本人	6	-	4	イタリア人]	あまりそう思わない
1	[日本人	2	-	0	イタリア人]	全然そう思わない
平均	日本人	3.45	-	3.76	イタリア人	$t(95) = -2.441; p < .05$
2. きれいな字を書きたいと思いますか

4	[日本人	77	-	33	イタリア人]	そのとおりだ
3	[日本人	17	-	45	イタリア人]	まあそう思う
2	[日本人	4	-	16	イタリア人]	あまりそう思わない
1	[日本人	2	-	6	イタリア人]	全然そう思わない
平均	日本人	3.68	-	3.04	イタリア人	$t(95) = 4.104; p < .001$
3. 自分の言いたいことを相手がなかなかわかってくれなければ、わからせるよう努力しますか

5	[日本人	21	-	69	イタリア人]	いつでもそうする
4	[日本人	45	-	24	イタリア人]	よくそうする
3	[日本人	26	-	4	イタリア人]	ときどきそうする
2	[日本人	6	-	2	イタリア人]	たまにしかそうしない
1	[日本人	2	-	0	イタリア人]	全然そうしない
平均	日本人	3.77	-	4.61	イタリア人	$t(95) = -5.160; p < .001$

4. 相手の言いたいことがなかなかわからないときは、わかるよう努力しますか

5	[日本人	20	-	71	イタリア人]	いつでもそうする
4	[日本人	41	-	20	イタリア人]	よくそうする
3	[日本人	33	-	6	イタリア人]	ときどきそうする
2	[日本人	2	-	0	イタリア人]	たまにしかそうしない
1	[日本人	4	-	2	イタリア人]	全然そうしない
平均	日本人	3.70	-	4.59	イタリア人	$t(95) = -5.094; p < .001$
5. おしゃべりすることは好きですか

4	[日本人	32	-	45	イタリア人]	非常に好きだ
3	[日本人	60	-	45	イタリア人]	まあ好きだ
2	[日本人	9	-	8	イタリア人]	あまり好きではない
1	[日本人	0	-	2	イタリア人]	全然好きではない
平均	日本人	3.23	-	3.33	イタリア人	$t(95) = -0.680; n.s.$
6. 非常に疲れたときでも、友人とおしゃべりをするとう元気になりますか

5	[日本人	11	-	14	イタリア人]	いつでもそうなる
4	[日本人	30	-	24	イタリア人]	よくそうなる
3	[日本人	40	-	36	イタリア人]	ときどきなる
2	[日本人	17	-	10	イタリア人]	たまにしかない
1	[日本人	2	-	12	イタリア人]	全然ない
平均	日本人	3.30	-	3.18	イタリア人	$t(95) = 0.511; n.s.$
7. おしゃべりすると疲れますか

4	[日本人	4	-	2	イタリア人]	非常に疲れる
3	[日本人	30	-	20	イタリア人]	まあ疲れるほうだ
2	[日本人	52	-	39	イタリア人]	あまり疲れない
1	[日本人	13	-	39	イタリア人]	全然疲れない
平均	日本人	2.26	-	1.86	イタリア人	$t(95) = 2.580; p < .05$
8. 非常に疲れたときや身体の調子が悪いとき、誰ともしゃべりたくないことがありますか

5	[日本人	9	-	12	イタリア人]	いつでもそうだ
4	[日本人	15	-	20	イタリア人]	よくある
3	[日本人	38	-	45	イタリア人]	ときどきある
2	[日本人	28	-	16	イタリア人]	たまにしかない

- 1 [日本人 11 - 6 イタリア人] 全然ない
 平均 日本人 2.83-3.16 イタリア人 $t(95) = -1.529 : n.s.$
9. ほとんど一日誰ともしゃべらないことがありますか
 5 [日本人 0 - 0 イタリア人] いつでもそうだ
 4 [日本人 4 - 4 イタリア人] よくある
 3 [日本人 4 - 16 イタリア人] ときどきある
 2 [日本人 26 - 31 イタリア人] たまにしかない
 1 [日本人 65 - 49 イタリア人] 全然ない
 平均 日本人 1.48-1.76 イタリア人 $t(95) = -1.700 : n.s.$
10. 友達が身体の具合が悪いときや元気がないとき、おしゃべりをして気をまぎらわせたり元気づける努力をしますか
 5 [日本人 11 - 51 イタリア人] いつでもそうする
 4 [日本人 23 - 33 イタリア人] よくそうする
 3 [日本人 49 - 14 イタリア人] ときどきする
 2 [日本人 6 - 0 イタリア人] たまにしかない
 1 [日本人 11 - 2 イタリア人] 全然しない
 平均 日本人 3.17-4.31 イタリア人 $t(95) = -5.778 : p < .001$
11. お客さんを家に食事に招くとき、会話がはずむように気を配るべきだと思いますか
 4 [日本人 72 - 65 イタリア人] そのとおりだと思う
 3 [日本人 26 - 35 イタリア人] まあそうだと思う
 2 [日本人 2 - 0 イタリア人] あまりそう思わない
 1 [日本人 0 - 0 イタリア人] 全然そう思わない
 平均 日本人 3.70-3.65 イタリア人 $t(95) = 0.420 : n.s.$
12. (仕事以外で) 初対面の人と話こむことはよくありますか
 5 [日本人 4 - 10 イタリア人] いつでもそうする
 4 [日本人 19 - 33 イタリア人] よくそうする
 3 [日本人 40 - 47 イタリア人] ときどきする
 2 [日本人 23 - 10 イタリア人] たまにしかない
 1 [日本人 13 - 0 イタリア人] 全然ない
 平均 日本人 2.79-3.43 イタリア人 $t(95) = -3.390 : p < .01$
13. 誰かといっしょにいるときに話がしばらくとぎれると気まずいですか
 4 [日本人 23 - 22 イタリア人] そのとおりだ

- 3 [日本人 51 - 31 イタリア人] まあそうだ
 2 [日本人 13 - 33 イタリア人] あまりそうではない
 1 [日本人 13 - 14 イタリア人] 全然そうではない
 平均 日本人 2.85-2.61 イタリア人 $t(95) = 1.236 : n.s.$
14. どんなことでも時間をかけて話しあえば、お互いに理解しあえると思いますか
 飽戸の日本人
 4 [日本人 15 - 14 イタリア人] そのとおりだと思う 7
 3 [日本人 30 - 51 イタリア人] まあそうだと思う 34
 2 [日本人 41 - 27 イタリア人] あまりそう思わない 46
 1 [日本人 13 - 8 イタリア人] 全然そう思わない 14
 平均 日本人 2.48-2.71 イタリア人 $t(95) = -1.360 : n.s. 2.36$
15. 人が何を考えているかを理解するためには話をする必要があると思いますか
 4 [日本人 60 - 54 イタリア人] そのとおりだと思う
 3 [日本人 34 - 32 イタリア人] まあそうだと思う
 2 [日本人 4 - 12 イタリア人] あまりそう思わない
 1 [日本人 2 - 2 イタリア人] 全然そう思わない
 平均 日本人 3.51-3.38 イタリア人 $t(95) = 0.873 : n.s.$
16. あまりしゃべらなくても自分の言いたいことを何でも推察してわかってくれるような友人がいれば良いと思いますか
 4 [日本人 47 - 44 イタリア人] そのとおりだと思う
 3 [日本人 34 - 40 イタリア人] まあそうだと思う
 2 [日本人 13 - 8 イタリア人] あまりそう思わない
 1 [日本人 6 - 8 イタリア人] 全然そう思わない
 平均 日本人 3.21-3.20 イタリア人 $t(95) = 0.069 : n.s.$
17. 非常に明らかだと思うことはわざわざ口に出して言う必要はないと思いますか
 4 [日本人 20 - 10 イタリア人] そのとおりだと思う
 3 [日本人 37 - 42 イタリア人] まあそうだと思う
 2 [日本人 41 - 34 イタリア人] あまりそう思わない
 1 [日本人 2 - 14 イタリア人] 全然そう思わない
 平均 日本人 2.74-2.48 イタリア人 $t(95) = 1.539 : n.s.$

18. いくらわかっていることでも、ちゃんとことばに出して表現してもらわなければ安心できませんか

飽戸の
日本人

4	[日本人 21 - 14	イタリア人]	そのとおりだ	16
3	[日本人 40 - 46	イタリア人]	まあそうだ	43
2	[日本人 34 - 34	イタリア人]	あまりそう	36
1	[日本人 4 - 6	イタリア人]	全然そうではない	5
平均	日本人 2.79-2.68	イタリア人	$t(95) = 0.649 : n.s.$	2.70

19. 重要なことからは、口頭や電話ではなくて、文書や手紙で伝達したり確認すべきだと思いますか

飽戸の
日本人

4	[日本人 21 - 32	イタリア人]	そのとおりだと思う	15
3	[日本人 36 - 30	イタリア人]	まあそうだと思う	41
2	[日本人 34 - 20	イタリア人]	あまりそう思わない	40
1	[日本人 9 - 18	イタリア人]	全然そう思わない	4
平均	日本人 2.70-2.76	イタリア人	$t(95) = -0.282 : n.s.$	2.67

20. あなたは、わかりやすく話す努力をしていますか

5	[日本人 9 - 64	イタリア人]	いつでもそうする	
4	[日本人 51 - 32	イタリア人]	よくそうする	
3	[日本人 23 - 2	イタリア人]	ときどきする	
2	[日本人 17 - 2	イタリア人]	たまにしかそうしない	
1	[日本人 0 - 0	イタリア人]	全然そうしない	
平均	日本人 3.51-4.58	イタリア人	$t(95) = -6.860 : p < .001$	

21. 会合などで何もしゃべらない人でも、意見を持っていると思いますか

飽戸の
日本人

4	[日本人 42 - 72	イタリア人]	そのとおりだと思う	33
3	[日本人 51 - 24	イタリア人]	まあそうだと思う	57
2	[日本人 4 - 4	イタリア人]	あまりそう思わない	10
1	[日本人 2 - 0	イタリア人]	全然そう思わない	1
平均	日本人 3.33-3.68	イタリア人	$t(95) = -2.844 : p < .01$	3.24

22. あまりたくさんおしゃべりする人間にろくなものはいないと思いますか

飽戸の
日本人

4	[日本人 7 - 10	イタリア人]	そのとおりだと思う	8
3	[日本人 17 - 28	イタリア人]	まあそうだと思う	26
2	[日本人 39 - 38	イタリア人]	あまりそう思わない	51
1	[日本人 37 - 24	イタリア人]	全然そう思わない	16
平均	日本人 1.93-2.24	イタリア人	$t(95) = -1.630 : n.s.$	2.28

23. あまりしゃべらない人間は信用できると思いますか

4	[日本人 0 - 16	イタリア人]	非常に信用できる	
3	[日本人 55 - 59	イタリア人]	まあまあ信用できる	
2	[日本人 36 - 20	イタリア人]	あまり信用できない	
1	[日本人 10 - 4	イタリア人]	全然信用できない	
平均	日本人 2.45-2.88	イタリア人	$t(95) = -3.067 : p < .01$	

24. 重要でないことはしゃべらない方がよいと思いますか

4	[日本人 7 - 2	イタリア人]	そのとおりだと思う	
3	[日本人 16 - 20	イタリア人]	まあそうだと思う	
2	[日本人 56 - 50	イタリア人]	あまりそう思わない	
1	[日本人 22 - 28	イタリア人]	全然そう思わない	
平均	日本人 2.07-1.96	イタリア人	$t(95) = 0.661 : n.s.$	

25. 時として、嘘をつくことも方便として正当化されると思いますか

飽戸の
日本人

4	[日本人 54 - 14	イタリア人]	そのとおりだと思う	22
3	[日本人 39 - 30	イタリア人]	まあそうだと思う	54
2	[日本人 4 - 36	イタリア人]	あまりそう思わない	22
1	[日本人 2 - 20	イタリア人]	全然そう思わない	3
平均	日本人 3.46-2.38	イタリア人	$t(95) = 6.306 : p < .001$	2.97

26. 人はいつも本当のことを言っているとは限らないのだから、いつも真意を見抜くよう努力すべきだと思いますか

飽戸の
日本人

4	[日本人 20 - 44	イタリア人]	そのとおりだと思う	32
3	[日本人 30 - 42	イタリア人]	まあそうだと思う	47

表4. 日伊の回答者97名のふるまいと質問項目の関連。「クロス集計の数量化」による第2軸上での配列。

質問項目	0/10/20/20/	4/27/	3/12/14/21/22/	0/23/	1/11/	0/15/16/10/10/	2/24/17/13/22/	T
(I-22)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-46)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-28)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-30)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-20)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-11)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-20)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-17)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-24)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-48)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-27)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-3)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-7)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-48)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-22)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-48)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-3)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-11)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-28)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-11)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-3)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-13)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-14)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-12)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-7)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-10)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-28)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-24)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-48)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-15)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-20)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-43)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-1)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-17)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-44)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-47)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-23)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-3)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-23)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-3)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-4)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-32)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-10)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-47)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-22)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-9)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-31)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-23)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-31)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-19)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-21)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-20)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-44)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-19)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-10)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-20)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-20)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-10)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-27)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-3)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-3)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-24)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-1)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-20)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-2)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-21)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-41)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-9)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-2)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-23)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-3)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-30)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-15)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-12)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-41)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-40)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-42)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-40)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-18)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-4)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-25)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-20)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-30)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-14)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-20)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-32)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-43)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-10)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-3)	○	○	○	○	○	○	○	○
(I-45)	○	○	○	○	○	○	○	○

図1. 日伊の回答者97名の位置づけ。「クロス集計の数量化」による第1軸と第2軸上での配置。

